



分析化学はポジティブ？

過日の母校名古屋工業大学での年会で、産総研の中村圭介先生からバトンをいただきました日本薬科大学の大室智史と申します。中村先生には埼玉大学の渋谷雅美先生の研究室に在籍されていた博士課程の学生時代から同世代の研究者で似たテーマを研究対象としていた者として親近感を抱いており、いつも仲良くさせていただいています。

今回リレーエッセイを引き受けるにあたり、何をテーマにしようか思案していましたところ、研究室の学生から、「高校の時よりも大学の先生との方が話をする機会が多い」と言われまして、「そういえば、自分も恩師に言われて印象に残っている言葉があるな」と思い、これをテーマにして筆（キーボード）をとりました。

まずは簡単に自己紹介させていただきます。私は学部、修士と東京学芸大学の國仙久雄先生の下で、金属イオンを対象とした溶媒抽出や固相抽出について研究し、博士課程は名古屋工業大学の湯地昭夫先生の下で、イオン交換系や逆相系における物質移動のメカニズムについて研究し、現在もこれらの系を中心に研究を行っています。現在は縁あって出身地の埼玉にある日本薬科大学にて講師として勤務しています。教育学部卒の工学博士が薬学部勤めているという我ながら不思議な経歴です。

両先生ともに学生と話をするのが好きで、私も学生時代から今に至るまで相談に乗っていただけてきました。

國仙先生は、「君はどう思う？」、「この後どうしたい？」と私の考えを第一に自由に実験をさせてくれました。「わからないから実験しているんでしょ。やってみなさい」と実験とそこから得られる結果をととても大切にしてくれました。細かく指導されるのが苦手な私には、自由にやりたいことをやらせてもらえる研究がとても魅力的に映ったのを覚えています。

湯地先生からは、いつもデータに対して多面的にとらえることや全体像を見ることの大切さを教えられたと思っています。ある日の打ち合わせで、「君は細かいところにこだわりすぎている。もっと全体を見てデッサンを作らないと」とお話しされたのを印象深く覚えています。これは後日、シラノール基が残存する ODS シリカへの化学種の保持機構について「単純な疎水性相互作用に加えて、シラノール基との静電的な相互作用も寄与している」という考えを導くきっかけとなり、研究を大き

く進める助けとなりました。

さて、現在は私も教員として学生の指導に当たっており、両先生の下で学んだことを大切に『わからないを楽しむ』をモットーに研究指導をしています。毎年、新たに配属された卒研究生は、「これで大丈夫ですか？」、「不安です」と自信なさげに質問（確認？）してきます。そんなとき、「これだとまだよくわからないね、君はどう思う？」、「次は何をする？」と問いかけます。最初のうちは、質問したのに得たいものが得られず、不満そうな顔をしますが、暫くすると自分の意見を話せるようになってくる学生が少なくありません。ここまできたら、本人が見ていない部分を追加したりして視野を広げられるように気をつけています。

時折学生から、「先生はポジティブですね」と言われることがあります。私自身はポジティブの自覚はありませんが、研究を通じて身につけてきた、結果を大切に、状況を俯瞰して、次に取れる手段を考えてやってみることを学生にはよく話しています。これはつまり「分析化学＝ポジティブ」と言っても良いのでは？とこの文章をまとめながら思い、表題にさせていただきました。

冒頭の学生の言葉に戻りまして、私も学生の時からたくさん先生とお話しさせてもらっていたことを再認識させてもらう良い機会となりました。会員の皆様も恩師の言葉は心に深く刻まれていることと思います。現在も両先生はじめ分析化学会では多くの先生に大変お世話になっており、改めてお礼申し上げます。

キーボードを叩いている今日は大晦日、薬学部の6年生は、薬剤師国家試験に向けてラストスパートをかけている時期です。（模試の）結果に一喜一憂せずに、自分の結果（成績）を分析し、合格に向けた手段の構築と実行に全力を注いで欲しいところです。このリレーエッセイが発刊される頃には既に結果が出て、次のステップに進んでいる頃になると思いますが、分析化学で身につけたポジティブさで乗り越えてくれていることを祈念しています。

次号の執筆者は安田女子大学の川畑公平先生にお願いしました。川畑先生にはお忙しい中、ご快諾いただきましてありがとうございます。次回の学会でお会いできることを楽しみにしております。

〔日本薬科大学 大室 智史〕